

善照寺
寺報

ぜんしょうじ

第8号

〒272-0131

市川市湊十八番二十号 善照寺
電話 四七(三五七)二二三三
FAX 〇四七(三九七)一三三二

秋の日はつるべ落とし

善照寺住職 今岡達雄

昨年の秋にもこの言葉を書いたような気がして確かめてしまいました。昨年秋の寺報第四号は寺宝特集でしたが、書き出しは確かに同じ言葉でした。

「つるべ落とし」といつても、釣瓶のついた井戸などつくの昔に無くなってしまいましたね。しかし、日一日と暗くなる時間が早くなるなる様子は、まさに釣瓶が井戸の中に落ちていくように「するするーとーん」という感じです。

この時期になると浄土宗の寺では「お十夜」という法要が行われます。阿弥陀様への報恩感謝の法要といわれていますが、この地域(行徳)では秋の収穫祭という意味が強いです。お十夜の前になると住職が白い袋を配り、そこに秋に取れた新



米をいれてご本尊様への供物としたものです。農地の区画整理が行われ、地下鉄が通つてから、この習慣は無くなってしまいました。一年間一生懸命働いてお米が取れて、仏様やご先祖様に「ありがとございまして」と感謝の気持ちを入れて法要を行ったのでしようね。

残念ながら最近では秋の収穫というものが近隣から無くなってきました。確かに柿が色づいて秋の風情ですが、食べるものはいくらでもありますから柿を収穫するという感覚はなく、私たちの食糧になつているようです。身近なところから「感謝」の対象が無くなってしまったから、恵みをもたらしてくれる自然、周りの人々、先祖代々から受け継がれた物に感謝の気持ちも薄くなつているのかもしれない。もう一度、感謝の気持ちを思い起こすためにも「お十夜」に参加していただければ幸いです。

(合掌)

行事予定

平成十五年十一月・十二月の善照寺の年間行事の予定です。

お十夜会 十一月十七日(月)

善照寺本堂にて

一時 法話

午後一時から東京念仏院ご住職の中野隆英師の「おはなし」があります。一時ちょっと前までに本堂にお集まり下さい。

二時 法要

午後二時から、善照寺住職が導師、近隣のお寺の住職様と共に十夜法要を行います。

暮れの寺参り 十二月下旬

除夜の鐘 十二月三十一日

十一時半頃から釣り鐘をつき始めます。寒い夜なので樽酒、お汁粉、みかん等が配られます。十二時を過ぎると、ほどなく新年の初供養(修正会)が行われます。

住職法話

お十夜(じゅうや)の話

お十夜の意味

お十夜は阿弥陀佛への報恩感謝のための法要です。では阿弥陀佛への報恩感謝とはどのようなことなのでしょう。

佛になる方法とは

お釈迦様は出家して様々な修行を行って真理を悟り「ほとけ」になりました。お釈迦様のような人はともかく、私達のように煩惱にまみれた者はこの世の中で生きているうちに「ほとけ」になることはなかなか出来ません。「ほとけ」になれないと後生(亡くなった後)も苦しい生活を続けることになるそうです。お釈迦様は、そんな私達でも「ほとけ」になれる方法をお示し下さいました。

それが阿弥陀様のお話です。

本願とはなにか

無量寿経というお経には次のように書かれています。

「遠い昔、世自在王如来の時代に、ある国の王様が世自在王如来の説法を聞いて発心し出家し求道者になりました。その名は法蔵(ダルマカール)。法蔵菩薩は世自在王如来の指導のもとで修行し、悟りを得て佛となるために四十八の誓願(お誓い)を建て、その誓願を成し遂げるために六波羅蜜の修行に励みました。そして、全ての誓願を達成し十劫の昔に阿弥陀佛となられました。佛となる前のこの誓願は「本願」とも呼ばれ、その「はたらき」は今現在も私たちに降り注いでいます。

最も大切な十八願

浄土宗をお開きになった法然上人は、四十八ある本願の中で十八番目の願が最も大切なものであるとおっしゃられました。その十八願とは次のような内容

です。

「一切の人々が、誠の心をもつて信じ願って、私の国である極楽浄土に生まれたいと欲して、わずか十回でも私の名を呼んだならば、必ず極楽浄土に往生することが出来るようにしよう。」

つまり、たった十回「南無阿弥陀佛」と阿弥陀様の名前を呼ぶだけで私たちは極楽浄土に迎えられる。そこで「ほとけ」になることが出来るのです。

なぜ極楽浄土を願うのか

そこでは阿弥陀様の説法を聞き、心の平静(悟り)を得られ、誰でも「ほとけ」になることが出来る。

そこは不安や苦悩がなく、安心して暮らせる。

そこで私たちは超能力(宿命、天眼、天耳、他心)を得てこの世の状況把握が出来る。

先に往生した人々と再び会うことが出来る。

極楽浄土に往生できるということは、現世での安心を生み出す

十日十夜の善行

本願が示されている無量寿経というお経の最後の部分に、この世で十日十夜の善行を行うことは、極楽浄土で千年間善行を行うより価値があると書かれています。そして法然上人に依れば最大の善行とは念仏一行、つまりただ一心に阿弥陀様の名前を呼ぶことなのです。

たった十回「南無阿弥陀佛」と阿弥陀様の名前を呼ぶだけで私たちは極楽浄土に迎えられる。そこで「ほとけ」になることが出来るのです。先に亡くなった方々は阿弥陀様のお力で極楽浄土に生まれ新しい生活をされています。だから、阿弥陀様に感謝するのです。阿弥陀様の本願のお力に報恩感謝するのです。これがお十夜法要なのです。



死にゆく人へ

大切な人、かけがえのない人を失った。悲しんだ。自嘲した。大丈夫と強がった。泣いた。

そんな夢からさめた。大切な人はたしかにいる。失っていない。するとこんどは、その現実がありがたくてたまらなかつた。涙がこぼれ出た。

いつかは失わなければならぬものが、今ここにある。そのことがたまらなく嬉しかった。当たり前になりかけているもの。そんなものを大切にしようと思った。



死にゆく人よ。死の避けられなくなつた人よ。もうすぐ、あなたの一生に幕が下りようとしている。

どうぞゆっくり、人生を振り返ってください。あなたは今、そのすべてを失おうとしている。

いざ失うことになって初めて、人は気づくものです。自

分が知らず知らず手にしていたものの、大切さを。かけがえのなさを。

今、初めてわかることでしょう。この人生がいかに幸せに満ちていたことが。



あみだ
阿弥陀様です。阿

弥陀様はいつも、あなたのそばに居ました。

人は阿弥陀様が居ること、なかなか気づかないで生きています。それで人生がつらい、苦しい、つまらないと言っている。

でも、それを失うことになっ

仏さまからの手紙

た今、実はすべてが幸せだったことに気づいたでしょう。

阿弥陀様が姿を現されたのです。

大空の星々が、大地のすみからすみまでを見つめているように。阿弥陀様は、あなたをずっと見つめていました。



本当は、もっと早くこのことに気づくべきでした。そうすれば、もっと幸せに人生をすごすことができた。

けれども今、阿弥陀様に会うことができました。すばらしいことではありませんか。

あと数日でもいい。あと数時間でもいい。阿弥陀様とともにすごそうではありませんか。

死にゆく人へ。人はだれ

でも、死なねばならないときが来る。死にゆくことは、つらいことではありません。阿弥陀様はこれからも、いつまでも一緒にいます。あなたがこの世に残してゆく人も、阿弥陀様はすべて見つめています。だから心配しないで。

自ら死を選ぼうとしている人、生きる意味を見失っている人へ。あなたはもっと生きることが出来る。だから、迷わず生きることを選んでください。阿弥陀様をそばに感じながら、幸せに。

愛する者に先立たれた人へ。阿弥陀様は今、あなたに寄りそっているのです。先に行ってしまったあの人にも、こちらに残されたあなたにも。同じ阿弥陀様が寄りそっています。こんどはあなたが、阿弥陀様と一緒に生きてください。



(副住職)



【阿弥陀仏】

お寺との付き合い

お十夜(十一月十七日)

「お十夜」は阿弥陀様への報恩感謝のための法要です。法要趣旨については住職法話で詳しくお話したところです。それに加えて、昔は秋の収穫祭の意味がありました。一年の労働の成果を喜び、恵みを与えてくれた自然に、御守りいただいた先祖代々の霊に、また仏様に感謝をするために、とれた農作物をお供えして法要を行ったものです。ですから阿弥陀様への感謝の法要にあわせてお塔婆をあげ先祖や先亡諸霊の供養を行ったのです。

お塔婆の申込みは遅くとも十日までをお願いします。また、遠方の方には「出欠のはがき」を同封してあります。このはがきで出欠・塔婆等についてお知らせ下さい。また、近隣の方々には「出欠はがき」は入れてありませんので、塔婆のお申込みは電話で結構です。

今年から、遠方の方々にも、近隣の方々にも「十夜法要浄財袋」を同封しました。お十夜のお布施と塔婆代はこの袋に入れて寺までお持ち下さい。

お塔婆は一基四千円です。これとは別にお十夜供養のためのお布施(ご回向料)を包んで下さい。金額はお気持ち次第ですが平均五千円程度です。

暮れの付け届け

暮れの付け届けとは寺への「お歳暮」です。包み物(「歳暮」あるいは「志」)で現状では平均で五千円程度です。だいたい十二月下旬頃墓掃除・お花をお供えするときに届けに来られるようです。

昔は晦日に餅をつき、本尊へのお供餅を持って墓参に来られたよう、今でも十二月三十日に来られる方が最も多くなっています。

子供の頃は三月まで毎日お餅を食べさせられました。以来私はお餅が好きではありません。最近はお供餅が無くなって有り難いです。

墓掃除代

お盆と暮れの二回、墓掃除をいただいています。近隣の檀家様には八月と十二月に善照寺青年会(慧日会)の皆さんが集金に伺っています。遠方の方々は、申し訳ございませんが寺に来られる時にお納め下さい。各2000円、年間四千円です。

除夜の鐘

昭和三十五年、戦時に供出してなくなった梵鐘が新鑄されて以来、除夜の鐘についています。現在では善照寺青年会(慧日会)の皆さんのお手伝いを得、大勢の方々が鐘を撞きに見えられます。

大晦日の午後十一時三十分頃から撞き始めます。本来百八の煩惱を一つ一つ打ち消すため、百八回鐘を撞きます。最近は煩惱も多くなつたようで多少多めになつていくかも知れません。樽酒、お汁粉、みかん等がふるまわれます。本尊阿弥陀様へのお参りも忘れずをお願いします。

編集後記

愛らしいお地藏さんが合掌して微笑んでいる仏画がありませう。副住職が運営しているホームページを通じて知り合った方からのいただき物です。その方は宮大工のご友人にこの絵を書いてもらい、副住職に贈ってくださいました。我が家のお気に入りです。その絵には「あう人みんなお蔭様の人。今日またであう南無阿弥陀仏」と銘が入っています。忙しい日常に追われ、心や体が疲れているとき、人は感謝の気持ちをおぼえてしまいがちです。しかしこの絵を見るたびに思います。今日まで私がここに存在するのは、今まで出会ってきた人たちの支えがあつてこそなのだ。お顔が丸く、ほつぺたがふっくらしたお地藏さんが、やさしくあたたかく、私の心を和ませてくれます。(副住職室久美英)

<http://www.zenshoji.or.jp/fuku/>
「松庵(副住職のいおり)」